

## み手のドまんなか

七十七歳男性

わたし、七十歳半ばもすげて、このごろつくづくおのれの「いのち」というものと思われて参りました。

敗戦後のあの混乱の時代を少年期から青年期にかけて暮らしていたころは、いわゆる社会の荒波にもまれもまれて、その日その日を精一杯に生きてきました。そのころ「いのち」は、今日の今をどのように生きるかが精一杯。だから、勉強も、今年の米作りを如何にしたらよいか、この今年一年の家計のやり繰りはどうしたら、とまあ、目先の今日今年の事ばかりでありました。

また、人とのかかわり社会との関係を考える場合も、自己本位、おのれを中心な考え方をしていました。

とかく若い時代には、わたしの今日のいのちの幸せを願う。ここを焦点に暮らしていたように思います。「いのちの行く末」のこと、「老後」「死後」のことなんか眼中にないというよりも、そのようなことに関心をもつことは「若者らしくない」とむしろ排除しておりました。神社や寺に参るについても、ひたすら「今日のしあわせ」を祈つておりました。結婚の成功、合格祈願、災難避け、室内安全、病気平癒祈願などなど。

東井先生の「生きるも死ぬも、如来のみのドまんなか」というのがその意味と。なんだか頷けました。

ところが、いわゆる還暦ということでお年退職になり、高齢者の仲間入りをする

ころから、先ず、「病むいのち」を真剣に考えなければならなくなりました。私の場合、糖尿病と取り組みながら今日のいのちを生きねばなりません。病に負けてはなりません。克服できないまでも病気の今日のいのちをいかに生きて行くか。

あれから十年。七十を過ぎその半ばに達するところから、「やがて必ず死すべきいのち」を生きなければならなくなりました。

たとえ今的一日を考えるにしても、やがて死んで行くいのちの今日をどういきるのかと考えねばならなくなりました。

それはしかし、滅入った、後ろ向きな、退嬰的なものではないと私は思います。

昔のわたしなら、老後のことをまして死後のことを考えるなんて馬鹿げたことであつたでしよう。

しかしいくら目をつぶりごまかそうとし

ても老死はいやおうなくやってくる現実です。それを視野にいれた今日の命を考えようになれたのは、より大きいのちにめざめたから。生老死をふくんだ、若いころにはみえなかつた、ほんとうの命に出会えたと私はいまよろこんでいます。

先日、親戚の法事のときのお説教で、

「往生成仏」ということは、小さな今の・せせこましい自我のいのちではない大きないのちに生まれ変わること。生も病も死も、

まるごとつぶんでくださるほとけさまのいのちに包まれ救われることだと。また、そ

のほとけさまのおいのちのなかでは生も病も死も、そのまま生かされるのです。とおっしゃいました、「現生正定聚(げそしき・じょうじゆ)

きゅう)」と、親鸞聖人は説いておられるとか聞きました。

わたしは五月が大好きです。

皐月(さつき)まつ  
はなたちばなの香をかげば  
昔のひとの袖の香ぞする

青春時代のあのわくわくとした気分が甦ります。  
それでわたしは、家の中にジットしておらず、ついつい年甲斐もなく野山へ飛び出してしまうのです。

この歳になるとだれだつて病氣の一つや二つ、もたない者はいません。また体のあちこち故障だらけでしよう。  
でも、わたし思うのですが、こんなに命危なくなつた今になつて、はじめて命の「もつたいなさ」を感じとれるのではないかと思うのです。

寿命の寿という字がありますね。イノチと読む字ですが、またコトホグ・ヨロコビとも読みます。このいのちがあつてよかつたとよろこびことほぐ。これを文字通り感じられるようになつたのは、この歳になつてからです。

自然の野山を歩きます。

ついつい調子にのつて病・障害もわすれて歩き過ぎて失敗することもしばしばですが、でも、後悔しません。

特にこの五月の野山は緑。若葉が燃え立ちます。海辺には春の潮風がそよと吹き渡ります。ヤマブキの花の黄、藤のはなの紫。ウグイスはじめ野の鳥、山の鳥のさえずり。それらがいっぱいいわわたしのいのちをことほいてくれます。

お經さまには、應身・化身、いろいろに姿をかえたほとけさまが「寿命無量」とわたくしのこのいのちをことほいでくださるのだと説いてあると教えていただいたことで思い出されます。

## 五月のわたし

さあ、皆さん。歳がよつてるから、病があるから、足腰が痛むからと減入つてしまつたり、しけこんだり、寝込んでしまわないで、野にてて働きましょう。山歩き、海辺の旅を歩きましょ。

それを手掛かりに、わたしのこの寿命、不可思議な光り、無量ないのちから、ことほがれているよろこびが味わえるのでないかとわたしはこの頃思っています。

## 六月

## 水無月

## のこよみ

四日

湯口 久男様忌明法事

六日

西宗寺・本覚寺永代経

七日

光顯寺夏法座

八日

連研修了者大会

十二日

中山 峰子様法事

十三日

真覚寺永代経

十八日

岩出 ムラ様法事

十九日

西方寺永代経

十四日

納骨参拝研修旅行

二十一日

福成寺・長專寺永代経

二十六日

木村 綾子様法事

二十七日

組長副組長研修会

高福寺永代経

敏雄様法事

関岡



## 徳次じいさんのおしえ

隣の家の徳次おつさんは、私にとって育ての親でありました。

戦死したわたしの父に代わって、五歳のときから五十年間、何から何まで、教育をついていた方です。学校行きにも父兄として付き添ってくれました。もちろん農業については一から十まで手取り足取りお世話になりました。

その徳次おつさんの教えは、「唯だ」という一言。

ただ学べ、ただ土に聞け、ただ自然に問え。

晩年になつておつさんはあるとき、「わしが毎朝唱えているお正信偈のおしえは、「ただ」ということ。あの短いおつとめさんなのに、何度も何度も「唯じやぞ唯じやぞ」と繰り返し繰り返し注意くださる親鸞様じや。最後には「唯可信斯高僧説」と、唯だ信じよと押さえてらつしやる。親鸞さまのおしえは要するに「唯」と言うこと。



わしもなー、お正信偈読むときにも、若い時には、考え考え、このこのことばは？という具合に読んでいたが、結局なにもわからなんだ。今になつて、「ただ念佛」「ただお正信偈」と読んで見ると、なんと如来の声も聞こえてくださる。

誰に聞くのや。どう聞くのやという計らいをやめて、唯だ聞く、とにかく聞く。あくまでも聞く。いつも聞く。何にでも聞く。

徳次おつさんは、なにかにつけてそう教えてくれました。



「本弘誓願・不可思議力（他力）」を象徴するものと示してくださいます。  
そしてまた親鸞さまは  
阿弥陀如来さまのお呼び声を聞いてめざめたひと、この人を、広大勝解の人、人のなかの分陀利華（白蓮華）と、たくさんの中諸仏菩薩さまからもほめ讃えられるのです  
とお正信偈にも歌われています。

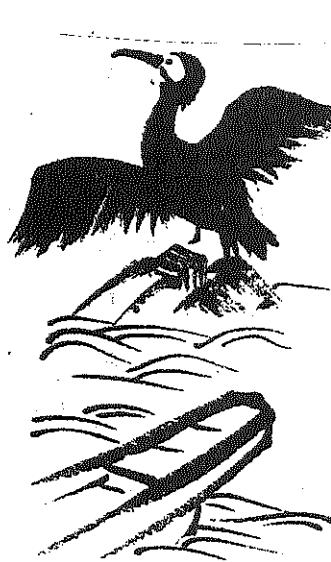
昨年末、十六年もいた愛犬「カール」が病死しました。悲しくて淋しくて、私自身元気を喪（うしな）いかけてしまいました。

今度、きてくれた九歳の牡犬は、カールと同じゴールデンレトリバーで「レン」と言います。飼い主から捨てられて犬猫病院に預けられていたのを貰い受けました。おとなしくて、よくしつけられていて、なぜ飼い捨てられたのか不思議なほどです。

この犬の名前が「レン」。

なぜレンなの、どんな字をかくのと尋ねても分かりません。そこで私、勝手にレンは「蓮」だと決めました。

というのは、同じころ、チッチャな子猫が迷い込んできて、それに「ふじこ」と孫たちが命名しました。おそらくわが家の庭の藤棚の藤にちなんだようですね。それなら同じ季節のバスの蓮（レン）と私は決めたのです。



## ことわざ

### ☆鳥がばまわれ

急いでいる時  
あせつて近道するよりも  
すこし遠そだけれど  
周り道した方が  
けつきよく早く行ける。ということ  
(あなたの場合、こんなことがあります)

(あなたの場合、こんなことがあります)

(あなたの場合、こんなことがあります)

☆一鬼を追うものは  
一鬼をも得ず

あつとも こつとも  
欲張つて いるうちに  
けつきよく

両方とも逃げられちやつた。

(あなたの場合、こんなことがあります)

(あなたの場合、こんなことがあります)

わしら人間は、どんなときでもおのれ中心。おのれ中心に、あれは善あれは悪と判断してしまう。大抵の場合、そのときの自分が都合が良いか悪いかで物を判断してしまう。自分の色眼鏡でしかものを見る事ができる。

先生さまのおっしゃの教えにも、自分の浅はかな考へで反発してみたり。

しかし、ほかのことはともかく、自然相手の農業ではそうはいかん。土のことは土

葬儀
四月二十三日
湯口 博道 さま
八十八歳

「高原の陸地には蓮は生じない。汚い湿地に蓮華は生じるのだ」。  
このことは汚い泥凡夫めあてに願いをかけたらきかけてくださる阿弥陀如来のおこ